

李恢成

禁じられた土地

見果てぬ夢 Ⅰ

禁じられた土地

見果てぬ夢 Ⅰ

李恢成

講談社

禁じられた土地——見果てぬ夢1

一九七七年十一月二十四日 第一刷発行

著 者 李恢成

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二／郵便番号 一〇二
電話東京〇三三九四五―二二二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 九八〇円



落丁本・乱丁本はお取り替えます（文一）
© I Fue Song 1977. Printed in Japan

禁じられた土地

——見果てぬ夢 1

「群像」一九七六年七月十一月号掲載

装幀 辻村益朗

著者写真撮影 野上 透

ナムハンサン
南漢山の上空に、機はさしかかっていた。もうすぐ、ソウルだ。眼下に、嶺東国道が腸のように伸びていた。

機体はソウルの街に挨拶を告げるように大きく旋回の態勢をとった。赫土があざやかで眼が冴えるようだ。遠くに漢江がゆうゆうとくねり、清溪川チョンゲチョンの細い流れが媚びている。きらきらと煌きらめいていくビルビルの光とごみごみして燻くすんだ川辺の板子村バンジャチョン（掘立小屋）。機は両翼をきしませ、薄い雲を切り裂きながら高度を下げていった。盛りあがってくる地表には迫力が感じられる。あらゆる人間の生命の呼吸が迫ってくる。地表は乗客に不安と安堵をかもし出す。乗客の心理を機は男性的に抱擁する。二の足を踏まずに、大気をかいくぐり地上を搔き寄せて接近していく。後部のシートで、騒々しくしゃべり合う声がしていた。気圧のせいかな、ちょっと鼓膜がおかしくなった。すぐに、僑胞らしい女達の声は返ってきた。

チヨナムシギ
趙南植は、聖書に目を落とした。ものの数分もして、ゴトンという重い質感が足の裏にひびいて

きて、すぐに機内の音響がかわった。軀がかすかにシートの背中に引かれた。

読みかけの聖書のページを伏せると、南植は腰のベルトを外した。身を屈めて、足元のポストン・バッグをひらき、聖書をしまった。チャックをしめるときに、母が持たせてくれた純毛のジャケットが鉤目^{かぎめ}に引っかかってしまった。編目がほぐれないようにと、注意して外した。何か、魚の口蓋から釣針を外している感じだった。

それから、窓を見た。澄んだ光線が目をとらえた。滑走路にそった芝生が霜枯れていて、ところどころが禿になっている。塹壕が点々と見えた。紫色をした固そうな土塁が、光をにくく照り返している、銃座が鋭角に空をにらんでいた。とぐろを巻いた蛇が、によつきりと鎌首をもたげている具合にうつる。迷彩色の軍服に身を固めた複数の兵士が、その塹壕のなかで蠢^{うご}めいている。

こんな空港の光景に、はじめて南植がお目にかかったのは四年前のことだ。一九六七年の初春だった。つい先日のことみたいな気がする。日本で大学を卒業してから、思うところがあって、ソウル大学の修士課程に入学することにした。それが最初の、祖国との対面であった。あのときは、目に映るものが、すべて荒っぽかった。雲間からはじめて祖国の地を垣間見たときは、歓喜とも呻き声ともつかぬ叫びが喉咽にからまり、貼りついたままだった。あいにくの悪天候のせいで視界が悪く、その上、機体が揺れていた。祖国の空は荒っぽい歓迎をして、自分という半チヨッパリの度胸を試していたみたいだ。北に向って遡行する東海岸は崖が切り立っていて、白波を翻弄していた。灰褐色にけふる半島は、つい今しがた海上に浮上してきたばかりの島みたいに山巒が苔むして見えた。背骨のたわんだ太白山脈はひどく不興そうだった。するとそんな南植の目には、太白山脈が雲

のなかで行き仆れた行者みたいにうつってきた。凍傷にやられてしまい、かじかんだ手足を縮めてしだいに眠りこんでいきながら、なんとか目を醒まし起きあがろうと苦勞している行者。

そのときの印象がいまもありありと目に焼きついていた。

隣のシートに坐っていた細い顎をした男が軽い伸びをして、

「着きましたね」と、南植を見て曖昧に微笑んだ。

「ええ」と南植は短い返事をしただけだった。

羽田国際空港からたまたま乗り合わせた客である。南植よりもいくつか年上の見当だが、聖書をひらくのを眺めて、

「天主教徒ですか？」と如才なく話しかけてきた。「いいえ、違います」と相手を見あげて答えた。すると、彼は慶尚道訛りともつかぬ南植の韓国語のつたない発音から在日僑胞と当りをつけたのか、いろいろと話しかけてきた。南植は話に乗りたくなかった。邪魔をされたくなかったせいもあるが、僑胞と知ったとき、相手の表情に、ある寛容さが浮んできたのがわずらわしく感じられたからだ。僑胞学生で、ソウル大学の大学院に在籍中だとわかると、「おお」と彼は大笑いにおどろいてみせた。そして背広の内ポケットから名刺を取り出し、韓国肥料……と記されたその会社をしめしてから、何かをしやべった。韓国の独占的資本系列の会社に勤めていて、商用で日本に往き来しているらしい。その話し方には、自分の職責にたいする自負とも愉しみともとられるものがまじっていた。南植は興味を失い、何度か空返事をしていたが、やがて「失礼します」と断って、聖書をひらいたのだった。

「じゃあ、お先に」商社マンは立ちあがり、アタッシェ・ケースを手にした。「どうぞ」南植は目礼してから少しそのまま坐っていた。ゆっくり立ち上って、通路の乗客のあとに並んだ。着ぶくれた同胞の女性たちがやかましく日本語でしゃべりながら反対側の座席の方から出てきた。めいめいが手荷物をいくつかずつかかえている。「キヨ子、それチャント持ったか」凋しなびた顔をした初老に近い女が、金の指輪をはめた手を伸してせつつくような口調で言った。「うるさいよ、母さん。ちょっと静かにしてよ」毛皮のコートを着た大柄の娘が、周囲を気にしてかひどく顔を赤らめて切口上で言い、母親の腰を赤いバスケット風の手提げで小突いた。「忘れるかと思つてな」母親は腰を突かれると小声で弁解し、邪険な娘の振舞いをそ知らぬ氣に脇を向いた。

いづれ商売で成功した同胞の家族であろうか。ソウルかどこかの故郷を訪ねていくのかも知れない。母親が両手に重そうにトランクを持っているので、

「持ちましょうか」と南植は声をかけた。

母親はびっくりした顔で見あげた。それから一瞬用心深い顔をしてから金齒を覗かせて愛想笑いを浮べたが、首を振った。

南植は苦笑を浮べ、先に立って歩いた。タラップに出ると、空港に風が巻いているのがわかった。風は頬を刺し、髪の毛を浚さらおうとした。地上ではジェット機の周辺を要務員が敏速なきびきびした動作で歩き回っている。胸の標識票が余計にそんな印象をあたえた。乗客たちは金浦キムポ空港のターミナルに向つて急ぎ足で歩いていった。五、六名の僑胞たちがもたもたして歩いていくのが目立つのだった。

ターミナルの送迎デッキには人々が鈴なりになっていた。正月のせいか、色とりどりの民族衣服を着た女性がおおくて、まるで花が風にあおられるように長い裳や襦チリゴリの紐が舞っている。南植の先を歩いていたさっきの商社マンが、ふいにアタッシュ・ケースを高くかざした。彼は送迎デッキを見あげながら甲高く何かを叫んだ。その方角に、赤ん坊を抱いたすらりとした容姿の女がいて、しきりに父親の姿をわが子におしえてやっていた。

ターミナルの中に入ると、南植はコートから旅券を取り出して行列に並んだ。構内は照明がついているのに、よどんだ空気が漂よっている。軍人の姿が目についた。出入国管理局の入国検査所は、羽田とおなじくボックスになっていて、いかめしい表情の係官が乗客の差し出す旅券に目を配り、スタンプを捺していた。列からはみ出したオーバーを着た小柄の老人が途方に暮れた顔をして、自分の妻を見ていた。ハイヒールを穿いた老婆がオーバーをひろげ、しきりに何かを探している。どうやら、イエロー・カードを失くしたらしく、「旅券に挿んでおいたのに」とか「アイゴ、どうしよう」と言っているのがきこえてきた。

南植は入管で提示した旅券を受けとり、ポストン・バッグを手前の方に動いていった。税関のチェックを受ける人々が並んでいる。前方でぱりぱりつとガムテープを剝す音がした。検査を入念にやっている気配がこちらに伝わってくる。ふと二階の方を見た。誰かが自分を見つめている気がしたのだ。しかし、それらしい人は見当らなかった。後方で「あった、あったよ」と素頓狂に叫ぶしわがれ声がひびいてきた。

南植のすぐ前に二人の日本人青年が立っていた。長髪の青年が肩にひっかけていたずだ袋をひよ

いと検査台にのせた。もう一人の五分刈りの青年も見習うように手にしていた皮トランクを差し出した。検査官がずだ袋をぐいと開いて、中のものを調べ出した。

「それはないよ」ふいに長髪の青年が苦情を言い出した。

検査官が何台かのカメラをつぎつぎに手にとって、ためつすがめつしてから、シャッターを押したからである。

「見れば、カメラだってわかるでしょ。そんな」

青年は誇りを傷つけられたらしい声で、口をとがらせた。その抗議を無視して、検査官はカメラのレバーを引き、すばやくシャッターを押しつつけた。

「よしてほしいな、まったく」

青年が長髪を払いあげ、紅潮した顔で言った。韓国取材にやってきたカメラマンらしかった。と、検査官がその青年をぐつとにらんで日本語で言った。

「その文句は、金日成のやつに言ってくれ。あいつらは、カメラの中に爆弾を入れて、わが国に持つてこない、そう思うか」

検査官のどぎつい言葉が、一瞬、長髪の青年を黙りこませた。しかし青年は不満を隠し切れぬ面持で連れの方を振り返り小声で吐き出した。「めっちゃくちゃだよな、まったく」連れは慎重に黙っていた。「もしあれが、本当に爆弾だったらどうするつもりなんだよ」青年は呆れ顔で言い、もはや検査官のなすがままに任せてしまっていた。検査官はすべてのカメラを検査し終えて納いこむと、ズツ袋の腹をボンとぶ厚い手で叩いた。

「O・K、ウェルカム。どうぞ」

今しがたのきびしい態度とは打って変った鷹揚な物腰で、彼は長髪の青年に頷ずいてみせた。

「韓国の、よい所、たくさん写して下さいよ」

青年はむくれたまま、身の廻り品をしまい、ズック袋を肩にかついで検査台の脇を通りすぎた。連れの日本人にたいする検査が終り、南植の順番になった。

「全部、出して」と検査官は、南植がチャックを開いておいたボストン・バッグを一瞥して言った。彼は腰のポケットからハンカチを取り出し、喉咽にからんだ痰を吐いて拭いた。そのあいだにも、彼の視線は南植の手元にそそがれていた。台の上は、聖書、ジャケット、携帯ラジオ、五、六冊の本、下着類、土産品などが並べられた。どこにも、禁制品はない。身の廻り品も全部取り出した。万年筆、財布、マツチ箱、腕時計、それからハンカチ、もうない。

検査官が携帯ラジオを手にしてひねくり回した。そばにしゃがんでいた別の係官が手を伸し、書物の題名にざっと目を通して「林巨正伝か」とつぶやきながら台の上に他の本といっしょに押し戻した。

南植は屈托なげに振舞っていた。柵の向う側を何気なく見ながら、人々の表情が暗いと思った。とそのとき、南植はどきりとして、いま眼の隅に入ってきた黒い映像からずっと目を逸した。

「納って」と検査官が倦んだ声で言った。

南植は前屈みになって、所持品をボストン・バッグに詰めはじめた。顔が上気しそうになるのをなだめている自分を感じた。へいま、あの円柱の脇でこちらを向いていた男、あれは金^{サム・ハン}在漢じゃな

かったか……」へまさか？ いや、たしかに彼だ」へしかし、なぜ彼がそこに立っているのか？」網膜に金、在漢の燦んだ顔が残っていた。構内に差しこむ光を背にしているのでその姿は黒い影みたいにみえたが、彼の隣に別の人間もうっそりと立っていたような気がした。南植はもういちど、相手を確認したい誘惑に駆られた。へいけない、見なかった振りをして通すのだ」

チャックをしつかりしめると、南植はさり気ない表情で出口の方に向って歩き出した。なぜか南植は、自分がこういう場面に遭遇するのを前から知っていて、いまその追体験をしつつあるような気になった。前からくる人間にぶつかりそうになった。へ落着け、走り出すな、平静を保つのだ」南植は、自分に命令しながら、大腿でまっすぐに歩いた。しかし氷の上を滑っているように不安定な歩き方をしているようだ。スピーカーから甲高い声が流れた。東京発のKAL機の時刻を告げていた。胸がふいに熱くなった。俺には、あの商社マンのような仕合せはないのだと一瞬激しく思った。もう少しで、構内から出ていく。そのとき後から急ぎ足で近づいてくる音を敏感にきき分けた。

南植は、いきなり両腕を左右から押えられた。驚ろいた風を装って、左右を振り返った。二人の男達は贅肉のない引きしまった顔をしていた。

「ちょっと、用がある。ついてこい」

「何ですか、これは一体――」

南植は腕を振りほどこうとして、不意の乱暴に抗議した。両腕をかかえこんでいる彼らの動作には、柔かい粘着力があった。

「とぼけないで、黙ってついてくるんだ」

皮ジャンバーの一人がそう言い放ち、うむを言わさぬ勢いで左右から引つ立てていった。人々が、道をあけて見ていた。貧しい身なりの少年が、面白そうに走ってついてきた。南植は、その少年の物見高い態度がひどくこたえた。しかし、どう出来るものでもなかった。

正門玄関から外に出た。広い駐車場の左手にポールが並び、各国旗が風になぶられていた。二人の皮ジャンバーは、車寄せに待機していた黒塗りの車の前に南植を引っぱっていった。運転席にいた男がすばやく出てきて、後部座席のノブをあけた。南植は簡単に中に押しこまれた。両側に皮ジャンバーの男達がどかと坐りこむと、車はハンドルを切って走り出した。

「頭を下げていろ」

横柄な声とともに、南植はぐいと首根っ子を抑えつけられた。連行者は、南植を前屈みの恰好にさせた上でさらに両手を首に組ませた。それからはじめて寛ろいで、一人が煙草をくゆらした。もう一人は、前屈みの窮屈な姿勢になって顔を紅潮させている南植を無表情に見つめていた。

どこに連行していくつもりなのか。しかしそれは、ソウルの人間ならば、三つの子供だって知っていることなのだ。ジープに似たこの型の黒い車は、中央情報部が使用しているものだった。南植は、自分がこの連中によって逮捕されたのを知った。胃が圧迫されて苦しかった。しかしそれは肉体的な圧迫というより精神的な緊張がもたらしてくるものなのかもしれない。すでに第二漢江橋を渡っていた。いよいよソウルの中だった。繁華街を走り、一刻も早くその人ごみから抜け出そうとしている走り方である。車が信号を渡り、大きく右に切れて坂を登りはじめたとき、南植は南

山だと心の中でつぶやいた。

祖国に留学にやってきたばかりの四年前の春、まっさきに朴采浩が案内してくれたのがこの南山公園であった。五つ年上の彼は、四・一九学生革命に参加したことのある青年だった。ソウルを一望の下に見渡すとすれば、この南山だと言って案内役を買ってくれたのである。そのときの朴采浩の説明はかなりシニカルなものだった。

「どうだい、ソウルは壮観だろう。倭奴はこのソウルを百万都市として京城の設計をしたんだが、今じゃ五百万からの人間がひしめいている。もうすぐ六百万に手が届くだろう。毎年、農村から四十万の離農民が雪崩を打ってこの首都に入りこんでくる、それがあの音かもしれないよ」

彼はいんいんと響くソウルの騒音に耳を澄し、展望台の鉄柵をぐいぐい揺ってから、さらに話を続けた。

「わが国の民衆は、なかなかの皮肉屋ときてるぜ。この南山からボイと小石を投げると、金か李か朴に当るといふ言葉があるがね、これはこの三姓が多姓でそれほど多くいるってことから来てるわけだ。ところでわが国の皮肉屋さん達がちょっと言い廻しを変えてみた。『南山から石を投げると、KCIAに当る』とね。ここには、南山大学があるんだよ」

当時の南植はそんな思わせぶりの話にもいちいち頷ぎた。祖国にやってきたものの、すべてが知らぬことばかりであった。自分にあつたものといえ、この祖国を愛しているという卒直な気持ちだけだった。

朴采浩は大丈夫なのだろうか？ 急に南植は不安になった。南山に連行されていくという予測を

したとき、すでに朴采浩のことが心に浮んできていた。彼のことだから、上手く逮捕を逃れたかもしれない。だが、そんな樂觀的な臆測ほど、こんな場合に無意味なものではなかった。自分に迫っている危険以上に、朴采浩の方が危ないと思えない。南植は、血が逆流していくのを覚えた。なぜ、あそこに金在漢が立っていたのか？ それに彼は一体どこに消えてしまったのか？

金在漢は、南植とほぼ同じ時期に、韓国に留学してきた。東京では韓国文化研究会などで何度か顔を合わせている。情熱的だが才氣走ったところがあり、個人的には、肌が合わなかった友人である。そんな個人的な趣味はどうあれ、自分の頭で物を考えていないような話のふしおしが南植には物足りなかった。私大の韓文研会長をしていて反政府的な言動をしていた彼が、その後韓国に留学するようになったのは、宗旨の鞍替えをしたせいだと一般に噂されていた。そんな噂だけで人を決めこんでしまうのを南植は好まなかったが、人間そのものが軽くみえる金在漢は避けていた。その彼がさきほど不意に、奇怪な姿をあらわしたのだ。

車のスピードがぐっと落ちた。

「よし、もう手を下してよい」

皮ジャンパーの男が太い声で言った。南植は顔をゆがめて両手を首から離れた。こんな連中にいちいち命令されている自分の境遇に屈辱を覚えたのだ。両肘が痺れて、他人の腕みたいだった。

「降りろ」車が停ると、もう一人の皮ジャンパーが言った。猫が鼠を弄ぶようなひびきが伝わってきた。

南植は車の外に出た。目の前に、カーキ色の高いコンクリートの壁でめぐらされたビルが見え

た。建物は窓のブラインドを降して、静まり返っていた。

二

悲鳴がきこえてきた。

途切れ途切れに喘ぎ、異様に昂まっていくな。悲鳴は、女の陣痛みたいにひびいてくる。この厳しい寒さの中で、胎内からわが子を分娩するのを必死に拒んでいるような女の声だ。

南植は壁に耳をあててみた。隣の部屋ではなく、やはり廊下から流れてくる声だった。誰が拷問されているのだろうか。それが誰にせよ、ぞっとする。喘ぎ声はいっそう生なましく募っていた。

もう二時間ばかり、この地下室の薄暗い部屋に放り込まれたままだった。尻からコンクリートの床の冷えが這いあがってきていた。軀の温みを逃さぬようにと自然と背中をまるめてしまう。両膝をかかえこんで、そうしていると、下宿の部屋の暖かみを思い出した。無事に金浦空港から往十里洞の下宿に着いておれば、今ごろは練炭を熾^{ヒキ}して一休みしているはずだった。下宿の小母^{アッジュモ}さんがやってきて、あれこれと息子にたいする愚痴や生活の繰り言をならべてみたり、お土産のお礼など言っているかもしれない。胸のつかえをそっくり吐き出すと、彼女は何事もなかったように元気になる。「エーラ、この気狂いめの世界の中だったら……」そう気前よく言い捨てて腰を起し、たぶん、早目に食事の準備に取りかかってくれるだろう。

その小母さんが茫然と立ちすくんでいる姿が目映ってくる。機関員たちが、南植の部屋を捜査している。机の抽出しをぬいて引っくり返し、天井の裏まで調べているのを戸惑いと怖れのまじっ